



考えながら歩む

—— 能動性を育てるために ——

津守 真

私は現在、幼い子どもの保育の実践から少し離れて見る立場にある。実践の最中には考えたくてもその暇がなかったことを、十年以上を経たいま、子どもと自分の成長を視野にいれて考えると、保育の実践に身を浸していたときには見えなかった本質が、一層よく見えてくるように思う。

はさみて切る——能動性を育てる

三学期のはじめ、T夫は指を動かしてはさみで切る動作をしていた。母親は子ども



が何かを切りたいと思っているのを察知して、「だめよ」ととどめた。傍らにいたF先生は、子どもがしようとしていることを叶えてあげたいと思い、また、母親を直ちに否定したくないと考え、新聞を持ってきて自動車の絵を切ってあげようとした。すると母親は、「やめてください。新聞は切らないことにしているんです」と言った。

それは毎朝新聞を読む父親への配慮であって、朝の家庭の様子がうかがわれてほほ笑ましかった。それでF先生は画用紙をもってきて、自動車の絵をかいて切り抜いた。

T夫はF先生が切り抜いた自動車を両手に持って、トランポリンのまわりを走っていた。自動車に乗っているつもりであるのは明らかだった。それからT夫はそれを両手に持って走り回った。切り抜いたものは、自分の手に持つことによって自分のものになり、思いのままに動かすことができる。

午後になって、T夫はパトカーを紙の上におき、クレヨンで形をなぞり、内部にぐるぐると曲線を描き、動く自動車を描こうとしていた。

三学期最初の日に、私は、ほかの子どもの髪を引っ張る男の子と小さな子ども達の間に入って忙しく動いていた。これでは私は保育者というよりも危険が起こらないための監視人ではないかとの疑いが心に生じていた。そのとき、母親から離れなかった一人の子どもが、自転車のわきに傘を垂直に立てようと苦心しているのが見えた。私はそれに答えて傘を真っ直ぐに保つのに一生懸命になっていた。そのとたん、小さい



子を守るために駆け出そうとした。突然私は足がひきつって動けなくなった。こんなことを語れるのも十年の歳月の後だからである。それから二週間あまり、私は保育の現場に出られなくなった。私の妻（F先生）は以前から幼児のクラスで保育者をしていたので、この間私はF先生から子ども達の話を聞くのを楽しみにしていた。右のことはそのときの記録のひとつである。

足を痛めて休んでいる間に、私はその頃の保育現場のことを何度も考えた。一人一人の子どもを考えると、それぞれに丁寧につき合いたい。小さい子どもは守らねばならないが、髪を引っ張る子どもにはもっと深い悩みがあるに違いない。傘を垂直に立てようとしている子どもは、母親から離れて自分の垂直の意志を立てるものにはどうするかを真剣に考えていたのだろう。これまで述べてきたT夫は回るものにとらわれている。本気にかかわりたい子ども達に囲まれ、どの子どもの能動性をも大切にしたいと考えると自分が引き裂かれてしまう。

この頃の日記の断想より

信じること 望むこと 愛すること

信じられないようなときに、疑わずに信じるのが、信じること。



悪条件がたくさんあっても。しるしを求めずに。

望むことができないようなときに、希望をもつこと。

子どもの保育を文化に結びつける仕事を。

愛することができないようなときに、愛すること。

他者の世界に関心をもつことは、どんなときにもできる。

この世の中は私が良いと思うように動くわけではない。

保育の現場も矛盾に満ちている。私はその中であって、生きつつ学ぶ。

工夫する保育者

二週間たって私も保育の現場に出られるようになった。

F先生は、T夫のために紙でプロペラを作った。T夫はそれを見てすぐに手に取った。先端の部分が何度もとれる。T夫は何度もそれを拾って私に渡すことを繰り返し続けた。回るものを好むT夫の、その関心を否定するのではなく、F先生は回る関心を子どもと共有しようとした。しかも、子どもと全く同じことをするのはなく、プロペラを紙で作るという新しい試みをした。保育者が花を添えて創造的に動くことによつて、子どもも自分で考えはじめた。



考えながら歩む

そのうちに、T夫はそばにあったスコップに気が付き、それを壁に立てかけた。私はこの子が積み木を垂直に立てることに関心を示したことを思い起こし（前号参照）、彼の意志を垂直のイメージに向けたら、能動性を喚起することになるのではないかと考えて、壁にクレヨンで垂直線を描いた。T夫はその線に合わせてスコップを立てた。そして手を放した。スコップは倒れた。私は水平線ならどうかと考え、床に水平線を描くと、T夫はスコップにまたがって出口まで来た。そして玩具籠から扇風機の玩具を見つけてそれを壁に立てかけ、倒すことを繰り返した。回るものに目を凝らしていたT夫が、回転と、垂直水平を組み合わせて考えている。子どもとかかわりながら保育者が思索しながら動く、子どもも一緒に考えながら歩む。

挫折をもちこたえる力

三学期が終わる頃、T夫は、保育室の隅の滑り台の上にひとりで上がっていった。そして手に持っていた電車を手から放した。下にいた子どもがそれを上に投げた。それが上までとどくとT夫はニッと笑った。何度もそれを繰り返した。そのうちに、下にいた子どもが投げた物がT夫の眉間にあたった。T夫は一瞬泣きそうになり、しばらく手を眉間に当てていた。泣くのをこらえているようだった。それから、こうやってぶつかったと自分と人に言い聞かせるように、手で自分の眉間を何度も叩いた。い



つもだったら、こんなとき、すべての活動が止まって動かなくなり、うなり声を出すのだが、このときは前の遊びにじきに戻った。下を向いてうなっているとき、子どもは他人に対する恨みや出口のない悩みが心に閉ざされていて、その目は過去に向いているのだらう。前進しつづけている人は、途中で挫折があっても、ひとときとどまって我慢することができる。耐えるというのは、場所と時に「とどまる」ことである。「とまる」のは、その場所から動かなくなることで、「とどまる」のとは違う。自分が選んだ活動に能動性をもって取り組む人は未来に向かって前進している。能動性がなかったら、とどまっても耐えることもないだらう。

帰りがけ、T夫は玩具籠に小さな車輪を見つけ、手に取ろうとした。そのとき一瞬早く他の子がそれを取った。T夫は迎えに来た母親を見ると、抱かれて泣いた。T夫がこんなに泣くことは家でもないことだと母親は言った。T夫は声を出して泣くことによって自分の気持ちを直接に表現した。

この日、家に帰ったとき、当時まだ家にいた娘のひとりがこう言った。「あることに意欲を失い、未来を失った人間は、そこに留まっても死んだ人間になるよ」と。私はその通りだと思った。

(愛育養護学校)